

アメレ語の自動詞と他動詞

野瀬昌彦

Masahiko Nose

滋賀大学 経済学部 / 准教授

本研究では、パプアニューギニアで話されるアメレ語¹⁾ (Amele) の動詞の他動性について、フィールド調査に基づいた調査結果を示す。動詞の他動性とは、「ドアが閉まる」と「私がドアを閉める」のような自動詞と他動詞の交代関係であるが、英語では *The door closes/ I close the door* のように、動詞 *close* は自動詞でも他動詞でも同形である。本論では特に、Nichols, Peterson & Barnes (2004) による、動詞の自動詞ベースか他動詞ベースかという議論に従い、アメレ語の18個の動詞の意味的形態的方向性を記述した。その結果、アメレ語は、自動詞から他動詞へ向かう方向が多く、逆に他動詞から自動詞へという方向は存在しないことが判明した。これは、アメレ語の動詞用法や派生がかなり単純化された特徴となっている傍証と考えられる。

本論では、第Ⅱ節に他動性に関する先行研究を示し、その上で第Ⅲ節にアメレ語の18個の動詞の自他の方向性のデータを示す。第Ⅳ節でデータから得られる論考をまとめ、第Ⅴ節を結論とする。

Ⅱ 他動性に関する類型論的研究

世界の言語において、動詞を持たない言語はなく、動詞は概して自動詞と他動詞に大別できる。そして自他の区別は主語や直接目的語、間接目的語の存在を考慮することが必須である (Dixon 2010)。さらに自他の交代において、動詞の形式のおよび意味的区別に関しては、言語ごとにも異なり、受動や再帰、使役形の用法を含むため、各言語の振る舞いを統一的に説明する必要があった。

1) 世界の言語のデータベースである「エスノログ (Ethnologue)」では、アメレ語は以下のURLで紹介されている。<https://www.ethnologue.com/language/acy/>

すなわち、言語類型論的な点からの他動性の研究がその一例である (cf. LaPolla et al. 2011)。本研究では、そのような他動性研究として、古典的な Hopper & Thompson (1980) と2000年以降に提示されたNichols, Peterson & Barnes (2004)を紹介する。

2.1. Hopper and Thompson (1980)

Hopper & Thompson (1980: 252) では、動詞の他動性を決定する10個のパラメータを提案した。それらを野瀬 (1994) では、ハンガリー語の動詞の分析に適用し、10個のパラメータを以下(1)のような特徴にまとめた。とりわけ、目的語や動詞に何らかの有標 (marked) な特徴がある場合、より他動詞的な特徴が高いわけである (cf. Naess 2007)。野瀬 (1994) では、他動詞に出現する直接目的語の特徴づけが、ハンガリー語の他動性の高低に影響を及ぼしていることを論じた。

- (1) 他動性が高いとされる特徴(野瀬1994²⁾)
- 目的語に何らかの違いを持たせている
 - 目的語が有性である
 - 目的語が部分的でなく、全体的に影響を受ける
 - 動詞が完了的である

2.2. Nichols, Peterson & Barnes (2004)

Nichols, Peterson & Barnes (2004) (以下、Nichols et al. (2004) と記す) では、世界の言語80言語をサンプルに、18種類の動詞(以下表1)における、自動詞か他動詞への意味的な方向性について議論を実施した。

表1: 調査サンプルの18動詞(Nichols et al. 2004: 156)

1. laugh/ make laugh	10. come to boil/ bring to boil
2. die/ kill	11. burn, catch fire/ burn, set fire
3. sit/ seat, have sit	12. break/ break
4. eat/ feed	13. open/ open
5. learn/ teach	14. dry/ make dry
6. see/ show	15. become straight/ make straight
7. be angry/ make angry	16. hang/ hang (up)
8. fear/ frighten	17. turn over/ turn over
9. hid/ hide	18. fall, drop/ let fall

Nichols et al. (2004: 149-150) は、例えば自動詞「学ぶ」と他動詞「教える」の動詞の派生に関して、各言語で異なることを指摘した。ロシア語では、「学ぶ」は「教える」の再帰形(教わる)であり、モンゴル語では「教える」は「学ぶ」の使役形(学ばせる)となっている。中国語や日本語では、「学ぶ」と「教える」は別々の形式である。このように、各言語によって、動詞に関して、動詞が自動詞ベースか他動詞ベースに属するか、そのどちらでもない語彙的に別々になるかのタイプがある。「学ぶ」から「学ばせる」へ向かう方向を他動的(TRANSITIVIZING)、一方で「教える」から「教わる」へ向かう方向を脱他動的(DETRANSITIVIZING)のようにタイプ分けすることで、各言語の動詞の意味的特徴を明らかにでき、通言語的な展望を観察可能である³⁾。

Nichols et al. (2004) では、上の表1に示した18種類の動詞に関して、その意味的な派生の方向性を調査し、意味的な方向性の記述として、以下(2)に示すタイプ分けを実施した。

²⁾ ハンガリー語(フィン=ウゴル語系の一言語)の場合、名詞(主語や目的語)に定冠詞や不定冠詞が付加する点、動詞の活用で直接目的語を持つ際に特別な活用形を持つ点、そして完了的な行為を表す動詞接頭辞が存在する点など、他動性の高さを区別する有標な特徴が存在する (cf. Dixon 2010: 148-149)。

³⁾ 国立国語研究所の共同研究プロジェクトの成果として、「使役交替言語地図」(The World Atlas of Transitivity Pairs (WATP)) が2014年6月にウェブで公開(<http://watp.ninjal.ac.jp/>)されたが、これはNichols et al. (2004)のこのタイプ分けの研究が基盤となっている。また、「使役交替言語地図」には、筆者のアメレ語のデータも追加される予定である。

(2) 動詞の意味派生の方向性:

a. Augmented

b. Reduced

c. Neutral

Double derivation, Auxiliary change, Ablaut

d. Indeterminate

Suppletion, Ambitransitive, Conjugation class change

e. Adjective

(2a) のAugmentedは自動詞に何らかの形式が付加することで他動詞が作られ、(2b) のReducedは逆に他動詞がベースとなっていて何らかの形式が付加し自動詞が作られる。つまり、(2a) はTransitivizingなタイプであり、(2b) は、Detransitivizingに相当する。(2c) のNeutralは自動詞と他動詞両方に何らかの要素が付加しているが、その方向性がどちらとも言えない中立的なものがここに分類される。(2d) もいずれにも決定できない分類になるが、これは語彙的な対立 (*die* と*kill*のようなSuppletion) や自動詞も他動詞もまったく同じ形式 (Ambitransitive) がここに分類される。最後に(2e) は一部の自動詞が動詞ではなく、形容詞の場合、ここに分類される。

III アメレ語の他動性

3.1. アメレ語とは

アメレ語は、パプアニューギニアで話されるニューギニア系 (Trans-New Guinea) の現地語のひとつである。アメレ語の記述文法としては、Roberts (1987) ⁴⁾ が存在する。アメレ語の話者は

5,300人(1987年SIL:脚注1参照)、2010年の現在でも、人口の増減はほとんどない模様である。住民は基本的にトクピシンとのバイリンガルで、50人から150人くらいの村落が40近く存在している。アメレ語の基本的な文法情報を以下の(3)に示す(Roberts 1987, 野瀬2014)。

(3) アメレ語の基本的な文法情報:

- a. 基本語順: 主語-目的語-動詞 (SOV)、名詞-形容詞、名詞-数詞、名詞-指示詞、所有者-名詞
- b. 主格-対格の文法関係
- c. 態は存在しない⁵⁾
- d. 名詞に付加する格が存在しない代わりに、10個の後置詞がある
- e. 分離可能所有と分離不可能所有の区別がある

次に、アメレ語の典型的な自動詞文と他動詞文の例をRoberts (1987) を元に示す。まず、自動詞文であるが、基本的には主語は必須で省略することはない。また、固有名詞などで主語が明示されていたとしても、人称代名詞uqa(3人称単数「彼・彼女」)をわざわざ入れることもある。

(4) Dana (uqa) ho-i-a.

man 3s come-3s-today's past
"A man came." (Roberts 1987: 162)

(4) では、文頭に 主語dana「男」が明示されているが、その後に3人称単数の人称代名詞uqaを入れることがある。次に、他動詞文であるが、「主語-直接目的語-動詞」の順で実現され、動詞に主語

⁴⁾ Roberts (1987) はマダンの町近郊のHaia方言を元としており、野瀬(2014)は山の方に位置するHuar方言をベースにしている。アメレ語には他に、Amele方言、Jagahala方言がある。

⁵⁾ 態の変種としてBenefactiveがあるとRoberts (1987) で指摘されているが、Huar方言では確認できていない。これについて本論では触れない。

や目的語の一致が発生する(例文(5))。しかしながら、直接目的語の動詞形一致が必ずしも必須ではないようであることが筆者の調査で判明した(野瀬 2014)。以下の(6)では、動詞部分において主語の一致はあるが、目的語の一致は観察されない。

- (5) Uqa jo ceh-ad-en.
3s house bulid-3p-3s-remote past
"He built houses" (Roberts 1987: 280)

- (6) Uqa jo cehe-i-a.
3s house build-3s-today's past
"He built a house." (Roberts 1987: 162)

さらに直接目的語と間接目的語が存在する二重他動詞文の例を以下(7)に示す。動詞は直接目的語と間接目的語の一致が必要になるのだが⁶、間接目的語の動詞での一致が必須となる一方で、直接目的語の一致は義務的でないようである⁶⁾。

- (7) Uqa sab i-te-i-a.
3s food pred.-1s-3s-today's past
"He gave the food to me."
(Roberts 1987: 281)

3.2. アメレ語の18の動詞の振る舞い

本節では、表1に示したNichols et al. (2004)の18対の動詞リストに関して、アメレ語での動詞の振る舞いを調査した。その結果を3.2.1から3.2.18に示す。

3.2.1. X laugh/ Y made X laugh:

- (8) a. Uqa casale-a.
3s laugh-3s.today's past⁷⁾

"He laughed."

- b. Ija odo-in uqa
1s do-1s-pred:caus 3s
casale-a.
laugh-3s.today's past
"I made him laugh."

アメレ語の動詞「笑う」の自動詞と他動詞の関係は、自動詞*casalea*「笑う」に対して、他動詞は使役動詞*odoc* (*to do*)を使用し「笑わせる」としている。

3.2.2. X died/ Y killed X:

- (9) a. Uqa aal-mec.
3s die-to be (dead)
"He died." (aal-migi on: "to die")
b. Ija uqa qagadug-a.
1s 3s kill-today's past:
"I killed him." (qagaduga: "to kill")

自動詞の「死ぬ」と他動詞の「殺す」は、アメレ語では語彙的な交代、つまりSuppletionで実現される。ただし、動詞「死ぬ」に相当する*aal mec*が実際には形容詞化(英語の*dead*)している可能性を考慮する必要がある。

3.2.3. X sat down/ Y seated X, gave X a seat:

- (10) a. Uqa bil-ec udun ute-a.
3s be-pred sit down give.today's past
"He sat down."
b. Uqa bilia.
3s be
"He was sitting down."

⁶⁾ 筆者の聞き取り調査(Haia方言)では、動詞形が*i-t-i-a*となり、間接目的語の一致要素-*te*-が一部消失しているように見える。ただし、方言差の可能性もある。

⁷⁾ アメレ語の18の動詞形の例文は、特に明記がない限り、過去時制はすべて今日の過去となっている。

- c. Ija uqa bil-ec udun
 1s 3s be-pred sit down
 uti-ga.
 give-3s.today's past
 "I seated him / I gave him a seat."

動詞「座る」と「座らせる」の自他の対立は少し複雑で、2系統存在する。ひとつは、動詞*udun*「座る」が自動詞も他動詞も同形 (11a, c) なのであるが、他動詞では補助的な動詞*utea*「与える」を加えている。もうひとつは、自動詞「座る」が*be*動詞的な表現*bil*で表現された結果 (11b)、自他で語彙的に異なる場合である。

3.2.4. X ate an apple/ Y fed X an apple:

- (11) a. Ija apul ji-ga.
 1s apple eat-today's past
 "I ate an apple."
 b. Ija apul uqa utig-an.
 1s apple 3s give-today's past
 "I fed him an apple."
 c. Ija odoin uqa
 1s do;caus.today's past 3s
 apul jeya.
 apple eat
 "I made him eat an apple."

次は動詞の「食べる」と「食べさせる」の自他であるがここでも他動詞形 (11b) で、補助的な動詞*utea*「与える」が使用され、「食べ物を与える」の意味で他動詞化している。また別のやり方として、自動詞*jiga*「食べる」に、使役動詞*odoin*を付加した使役形 (11c) で「食べさせる」にすることも可能である。

3.2.5. X is learning English/ Y is teaching English:

- (12) a. Uqa English iwal-dug-na.
 3s English learn-3s.present
 "He is learning English."
 b. Uqa Englis iwal-ade-na.
 1s English learn-be.3s.present
 "He is teaching English."

動詞「学ぶ」と「教わる」については、(12a, b) で、動詞の要素*iwal*-の部分⁸⁾が自他で共通しているのだが、語頭の要素*iwal*-以後の屈折部分以降で自他交代がなされている。Roberts (1987: 291) では、この形式は自動詞ベースで、他動詞形は目的語のクリティック-*d*-要素⁸⁾が付加しているとみなしている。前節の (2) のタイプ分けでは、Neutralに分類できる。

3.2.6. X saw Y's car/ Y showed X his car:

- (13) a. Ija uqa-n car fi-ga.
 1s 3s-poss car see-1s.today's past
 "I saw his car."
 b. Uqa-n car iha-tea.
 3s-poss car show me-3s.today's past
 "He showed me his car."

動詞「見る」と「見せる」の自他交代は、アメレ語では自動詞は*figa*、他動詞では*ihatea*と別の動詞で表されるため、語彙的な交代に相当する。

3.2.7. X is angry/ Y made X angry:

- (14) a. Uqa gemac-qea.
 3s angry-is.

⁸⁾ 直接目的語の存在を意味する-*d*-要素であるが、完全な屈折形や接辞とも分類しづらいため、本論ではクリティックと呼んでいる。

"He is angry."

b. Ija odoin

1s do-pred-today's past (3s):caus

(uqa) gemac-qea.

3s angry

"I made him angry."

アメレ語の「怒る」は動詞ではなく、形容詞で実現されると考えられる(14a)。「怒らせる」という他動詞的な状況(14b)は、形容詞「怒る」に、使役動詞 *odoin* を使用して表現される。

3.2.8. X is afraid/ Y frightened X:

(15) a. Ija umun-ig-inac.

1s afraid-1s-present

"I am afraid."

b. Uqa ija umun-tea.

3s 1s afraid-3s.today's past

"He frightened me."

c. Uqa odocob ija umun-iga.

3s caus.today's past 1s afraid

"He frightened me (he made me afraid)."

動詞「恐れる」と「恐れさせる」の自他交代は、*umun*-という動詞要素は(15a)と(15b)のように共通し、*umun*-以下に付加する屈折要素で自動詞・他動詞の違いを表す。他方、(15c)のように、使役動詞を使用して他動詞的な意味「恐れさせる」を表すことも可能である。

3.2.9. X hid / Y hid X

(16) a. Uqa yahun-iya.

3s hide-3s.today's past

"He hid."

b. Ija uqa yahun-du-ga.

1s 3s hide-today's past

"I hid him."

動詞「隠れる」と「隠す」の自他交代であるが、動詞の *yahun*-という「隠れる・隠す」という要素が自他共通で、(16b)の他動詞の方にクリティックとして他動詞マーカ-の *-d*-要素が存在している (cf. Roberts 1987: 283)。

3.2.10. The water boiled/ X boiled water:

(17) a. Wa udi-a.

water boil-3s.today's past

"The water boiled."

b. Ija wa udi-ga.

1s water boil-1s.today's past

"I boiled water."

c. Uqa wa udi-a.

3s water boil-3s.today's past

"He boiled water."

自動詞「お湯が沸く(水が沸く)」と他動詞「お湯(水)を沸かす」の関係であるが、(17a-c)を見る限り、動詞要素 *udi*-の後方の一致要素は主語が1人称か3人称の違いであり、動詞形は自他同形であることがわかる。

3.2.11. X's house burned up (down)/ Y burned down X's house:

(18) a. Uqa-n jo ja-udi-a.

3s-poss house fire-3s.today's past

"His house burned down.":

「事故で焼けた」

- b. Ija uqa-n jo ja-mani-ga.
1s 3s-poss house fire- 1s.today's past
"I burned down his house."
:「誰かが火をつけた」

動詞「燃える」と「燃やす」の関係であるが、アમેレ語では動詞に現れる語頭の要素 *ja-* が「火」を意味し、そこから自動詞と他動詞で別々の形式を取っている。これは、Double derivation に相当し、(2) の分類では Neutral に分類される。

3.2.12. The pencil broke/ X broke the pencil:

- (19) a. Pencil bah-eya.
pencil break-3s. today's past
"The pencil broke."
b. Ija pencil bah-iga.
(cf. Uqa pencil bah-eya.)
1s pencil break-1s.today's past
"I broke the pencil."
(cf. He broke the pencil.)

「壊れる」と「壊す」の自他交代は、動詞要素 *bah-* にそれぞれ1人称や3人称の一致形が付加していて、自他同形である (cf. Roberts 1987: 286)。

3.2.13. Window opened / X opened the window:

- (20) a. Window oso-doya.
window open-today's past
"The window opened."
b. Uqa windowoso-doya.

- 3s window open-today's past
"He opened the window."

自動詞「窓が開く」と他動詞「(彼が) 窓を開ける」については、(20a-b) が示すように、自他同形である。

3.2.14. The dishes dried (are dry) / X dried the dishes:

- (21) a. Plate garareya.
plate dry.present : adjective「乾いた」
"The plates are dry."
b. Uqa plate ac-meya.
3s plate dry-today's past
"He dried the plates."

動詞「乾く」と「乾かす」の対立であるが、(21a) の自動詞部分で出現する要素 *garareya* は動詞ではなく、形容詞と考えられる。他方、(21b) の *acmeya* は動詞(不定形は *acmiga*) であり、語彙的な関係、つまり Suppletion に相当すると言える。

3.2.15. The wire straightened out (was straight) / X straightened the wire:

- (22) a. Wire wele tutui-meya.
Wire already straighten.3s.today's past
"The wire became straight."
b. Ija wire tutui-mudiga.
1s wire straighten.1s. today's past
"I straightened the wire."

「ひもがまっすぐになる・ひもをまっすぐにする」の自他对立は、動詞に語頭部分に出てくる要素 *tu-*

*tui-*が自動詞と他動詞で共通しており、他動詞の後の要素-*mudiga*の*d*要素があり、これが他動詞マーカー機能を持つクリティックとみなすことができる。

3.2.16. The towel hung from the line/ X hung the towel on the line:

- (23) a. Towel line-na abusiga/ miga.
towel line-postp hang-today's past
"The towel hung from the line."
b. Ija towel line-na abusiga/ miga.
1s towel line-postp hang-today's past
"I hung the towel on the line."

自動詞は「タオルが³(洗濯) ひもにかかっている」、他動詞は「タオルを(洗濯) ひもにかける」の違いであるが、アメレ語にはその意味に相当する動詞が *abusiga* と *miga* の2種類がある。そして (23a, b) に見るように、どちらの動詞も自動詞と他動詞で同形である。両者の動詞であるが、*abusiga* は「かける」意味を持ち、*miga* は「置く」というニュアンスの違いがあるようである。

3.2.17. The boat turned over/ X turned the boat over:

- (24) a. Boat fare-doya.
boat turn over-3s.today' past
"The boat turned over."
b. Uqa boat fare-doya.
3s boat turn over-3s.today's past
"I turned the boat over."

17番目は「ボートがひっくり返る」と「ボートをひっくり返す」という自他の動作であるが、例 (24a, b) に見るように、自動詞と他動詞が同形である。

3.2.18. The stone fell (down) / X dropped (let fall) the stone:

- (25) a. Men tone-ya.
stone fall down-3s.today's past
"The stone fell down."
b. Ija men uein-tone-ya.
1s stone drop-today's past
"I dropped the stone."
c. Ija odoim men toneya.
1s do-1s.today' s past;caus stone drop
"I made the stone drop."

最後に、「石が落ちる」と「石を落とす」であるが、動詞 *toneya* は自他同形である。ただし、(25b) の他動詞文で動詞の前に *uein* が付加している。*uein* 自体が使役的な意味 (to make/to do) を持つとされるが、これまで見てきた他の動詞では、動詞の前にこのような要素が付く例は観察されてない。また、(25c) のように、通常の使役文で表現することも可能である。

IV アメレ語の動詞の 自他交代のまとめ

本節では、3.2.節で観察したアメレ語の18の動詞の自他交代とその意味的な傾向をまとめ、さらに他動性に関する項目や構文について議論を行う。最初に、3.2.節で検討した、アメレ語の18個の動詞の意味的な派生について、以下の表2にまとめた。

表2：アમેレ語の18個の動詞の派生の方向の分類結果(野瀬 2014)

1. laugh: causative, Augmented	10. boil: ambitransitive, Indeterminate
2. die/ kill: suppletion, Indeterminate , adjective?	11. burn: double derivation, Neutral
3. sit/ seat: Augmented , Indeterminate?	12. break: ambitransitive, Indeterminate
4. eat/ feed: causative, Augmented	13. open: ambitransitive, Indeterminate
5. learn/ teach: double derivation, Neutral	14. dry: adjective, suppletion, Indeterminate
6. see/ show: suppletion, Indeterminate	15. make straight: Neutral
7. make angry: adjective , causative, Augmented	16. hang: ambitransitive, Indeterminate
8. fear/ frighten: Neutral , causative, Augmented	17. turn over: ambitransitive, Indeterminate
9. hide: Neutral	18. fall: Augmented , causative, Neutral ?

表2を踏まえて、Nichols et al. (2004) が提示した基準(2)に従い、以下の(26)にその意味方向性をタイプ別に分類した。

(26) アમેレ語の動詞派生の意味方向性：

- a. 自動詞ベースで、動詞を使役化して他動詞になる (Augmented)：6個の動詞
- b. 他動詞ベースの動詞に自動詞化する要素が付加する (Reduced)：該当なし
- c. 自動詞と他動詞と同形 (Ambitransitive)：5個の動詞
- d. 同形であるが、他動詞形にクリティック的要素を付加している (Neutral)：5個 (または6個) の動詞
- e. 語彙的な解決及び形容詞使用 (Suppletion, Adjective)：4個の動詞

(26) の分類を見てみると、アમેレ語には調査対象となった18の動詞は、(10), (11), (15), (25) のよ

うに、(26) で示したタイプを2種類有する自他交代の例が存在した。また、(26b) の他動詞に自動詞化の要素が付加することで自動詞が派生される例(日本語だと「教える」から「教わる」になるような例)は観察されなかった。ただし、18のサンプル動詞以外で、(26b) のReducedと思われる自他交代がある。

(27) The shovel leaned against the wall./ X leaned the shovel against the wall.

- a. Shovel wall-na udo-taya.
shovel wall-postp lean-today's past
"The shovel leaned against the wall."
(人に語るような感じ)
- b. Ija shovel wall-na udu-ga
1s shovel wall-postp lean-today's past
"I leaned the shovel against the wall."
(自身がやる感じ)

(27) の動詞「シャベルが壁に立て掛けてある・シャベルを壁に立て掛ける」という自他交代は、動詞の語頭要素*ud-*は共通しているのだが、それ以降の屈折部分で自動詞側 (27a) に、余分な*-ta-*要素が付加している。そのため、他動詞から自動詞への派生方向であると考えることができる。アメレ語話者によると、自動詞の用法が人に語るような感じで、他動詞の方は、自身が立て掛ける感じであるとの報告があり、実際にReducedにあたるかどうかははっきりしない点がある。

次に、(26c) のように自動詞と他動詞でまったくの同形のものが5つある一方で、(26d) のような、動詞の最初の部分の要素が同形であるが、屈折部分にクリティックが付加することで他動詞を形成するものが5個 (または6個) 存在した。このクリティックは多くは*-d-*要素を伴うものであるが、事実上の直接目的語のマーカであるともみなすことができる。あくまで、他動詞の方にクリティックが付加される点において、何らかのAugmentedまたはCausativeな意味解釈を許すかもしれない。最後に (26e) のように、語彙的な関係(*die/kill, see/show, be angry/make angry, dry*)に相当する動詞が4例観察された。

自他交代に関して、野瀬 (1994) やHopper & Thomson (1980) では、他動性を左右する要素として、直接目的語の位置づけに関して指摘している。この点に関して、アメレ語にも適用させて考察する。本論の(1) では、野瀬 (1994) のハンガリー語の他動性の分析から、直接目的語の特徴づけを4点指摘した。それらは、「有標であること、有性であること、目的語全体が影響を受けること、そして動詞が完了的であること」である。アメレ語は、アスペクトが貧弱な言語であり、動詞の完了性に

関しては、ほとんど文法的な特徴が存在しない。有性であることと目的語が影響を受ける点についても、アメレ語ではそのような役割を持つ文法事項は存在しない。ただし、有標である点に関し、(26d) で取り上げた他動詞に出現する*-d-*要素のクリティックの存在がある。この (26d) でNeutralに分類された動詞においては、直接目的語の存在と他動性に関し、有意味な文法特徴を有するとみなすことができる。また、(3c) で指摘したように、アメレ語には態 (Voice) が存在しない。受動に類似した意味を伝えたい場合、以下(28b) のようになる。

- (28) a. Jesus asrec melait oso qagadon.
 Jesus black girl one kill-3s.today's
 past
 "Black Jesus killed one girl."⁹⁾
 b. Melait uju Jesus asrec qagadon.
 girl that Jesus black kill-3s.today's
 past
 "That girl is killed by Black Jesus."

(28a) の能動文「黒いキリストが少女を殺した」を受動的な意味「少女が黒いキリストに殺された」にしようとしたものが (28b) である。(28b) では、動詞形*qagadon*は一切変更がなく、直接目的語*melait*が文頭にきて、指示詞*uju*が付加されている。つまり、直接目的語に有標的な特徴づけがなされている。

最後に、他動性の議論の締めくくりとして、二重他動詞の例を検討する。以下の (29) に動詞*give*「与える」を使用した例を示す。アメレ語では動詞「与える」は*utiga*で、直接目的語の文と2人称と3人

9) Black Jesus「黒いキリスト」とは、2013年夏にマダン州で少女の殺人をした容疑者のニックネームである。

称の間接目的語を入れた例を示す (cf. Dixon 2010: 134).

(29) 二重他動詞文:

- a. Ija buk utiga.
 1s book give-1s.present
 "I give a book."
- b. Ija hina buk utiga
 1s you:2s book give-1s.present
 "I give a book to you."
- c. Ija Neret buk utiga.
 1s Neret:3s book give-1s.present
 "I give a book to Neret."

(29) で特徴的なのは、間接目的語が直接目的語の前に位置する点と、(29a) の単純な直接目的語のみの文の動詞形が *utiga* であるが、(29b, c) の二重他動詞文でも動詞形が同じ *utiga* である点である。これは、動詞が Ambitransitive な可能性と、動詞屈折が簡略化し、直接目的語や間接目的語の標示が一致をしていない(無視している)可能性がある。動詞屈折の簡略化の場合、Huar 方言の特徴または、口頭での調査による話者の口語用法の可能性もある (cf. Velupillai 2012: 246-253)。

V 結論

本論では、Roberts (1987) の記述文法の成果を利用しつつ、調査者自身の現地での聞き取り調査を実施し、アメレ語の動詞の振る舞いと他動性に関して論じた。その結果、アメレ語の動詞に関しては、自動詞から他動詞へ向かう派生、いわゆる Transitivity の傾向が強い点と自他同形が多い

点が判明した。Roberts (1987) が調査したのはアメレ語の Haia 方言で、調査者が聞き取り調査したのは Huar 方言で、方言間の差異が存在している可能性があるが、Huar 方言での口頭での調査において、動詞の一致形式が省略または簡略化が発生していることが判明した。

今後の課題は、18個より多い動詞の自他交代の例を収集する点と、動詞の一致部分やクリティックの機能を詳細に記述し、より深いレベルでの分析の必要性である。

【付記】

本論は、2014年2月22日に国立国語研究所で開催された NINJAL Typology Festa 2014 でポスター発表したものに加筆訂正を施したものである。当日、発表においてコメントを頂いた方々に感謝します。また、アメレ語の調査においては、パプアニューギニアのセイン村の方々、特に Neret Tamo さんにお世話になりました。本研究は科学研究費 若手研究(B)、課題番号 23720211 の支援を受けております。

本論の例文における略語は以下の通りである。
1,2,3: 1人称、2人称、3人称、s: 単数、p: 複数、
caus: 使役形、present: 現在時制、past: 過去時制
(過去形には today' past, yesterday' s past と remote past の3種類が存在する)、poss: 所有形、
postp: 後置詞、pred: 述語マーカー

参考文献

- [1] Dixon, R.M.W. (2010) *Basic Linguistic Theory*, Volume 2: Grammatical topics. Oxford: Oxford University Press.
- [2] Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson. (1980) Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56: 251-299.
- [3] LaPolla, Randy J., Kratochvíl, František, and Alexander, R. Coupe. (2011) On transitivity. *Studies in Language* 35: 469-492.
- [4] Næss, Åshild. (2007) *Prototypical transitivity*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- [5] Nichols, Johanna, Peterson, David A, and Barnes, Jonathan. (2004) Transitivity and detransitivizing languages. *Linguistic Typology* 8: 149-211.
- [6] 野瀬昌彦. (1994) ハンガリー語の他動性と使役構文について. 「関西外国語大学大学院研究論集」 第2号: 27-50.
- [7] 野瀬昌彦. (2014) パプアニューギニアのアメレ語の他動性 (ポスター発表). NINJAL Typology Festa 2014, 国立国語研究所.
- [8] Roberts, John R. (1987) *Amele*. London/New York/Sydney: Croom Helm.
- [9] Velupillai, Viveka. (2012) *An Introduction to Linguistic Typology*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.

Intransitive and Transitive Verbs in Amele, Papua New Guinea

Masahiko Nose

Amele is a Trans-New Guinean language spoken in Madang Province, Papua New Guinea. Amele has a strict subject–object–verb word order and rich verbal and nominal morphology. Roberts (1987) has already described the grammar of Amele based on the Haia dialect. His description is exhaustive, but the alternations of intransitive or transitive verbs have not been explained adequately, and there is room for further examination. Moreover, his research was conducted in the 1980s, and it is possible that Amele has undergone changes in its grammatical properties from then on. The author of this paper visited an Amele-speaking area in 2006, and then started describing its grammar based on the Huar dialect. The author had already found several differences between the Haia and Huar dialects in phonology, morphology and usages of discourse.

This study examined verbal transitivity (i.e., alternations of intransitive and transitive verbs) in Amele based on interviews and questionnaires to speakers of the Huar dialect. During 2012–2013, this research was conducted by using a questionnaire of 18 verbs from Nichols et al.'s (2004) list. They claimed that the sample of 18 verbs can be classified as transitivizing, intransitivizing, neutral, and indeterminate types. For example, English “laugh” shows the transitivity alternation, i.e., intransitive “laugh” and transitive (causative) “make laugh.” In this case, the verb “laugh” is transitivizing. Another verb

pair, “die” and “kill,” are in lexical alternation, and they are realized in verb alternation by suppletion. Such suppletion is classified as an indeterminate type. This study examines Nichols et al.'s (2004) verb list in Amele, resulting in the discovery of semantic orientations of verb alternations in Amele.

First, Amele has many indeterminate-type verbs, and some verbs such as “die” and “kill” have lexical alternations, and other verbs are ambitransitive, formally identical in both intransitive and transitive forms. Second, Amele does not have an intransitivizing type, as far as the sample 18 verbs are concerned.

Finally, this study claims that Amele does not appear to have an intransitivizing orientation, and the relations between intransitive and transitive are realized using causative verb(s), identical (ambitransitive) forms, or lexical suppletion. Conversely, this study found that there is a partial lack or omission of verbal inflections, particularly tense forms, person, and number, due to the oral investigation and spoken discourse.

